

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	坂倉杏介
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員 兼 総合政策学部教授	飯盛 義徳
	副 査	政策・メディア研究科委員 兼 総合政策学部教授	國領 二郎
		政策・メディア研究科委員 兼 総合政策学部教授	宮垣 元
		慶應義塾大学名誉教授	金子 郁容
学力確認担当者：			
<p>坂倉杏介君の学位請求論文は、『地域の協働プラットフォームの設計と参加主体の相互作用に関する研究 地域の居場所における「つながり」と「活動」の創出過程』と題し、全8章で構成されている。</p> <p>本論文は、地域における居場所を協働プラットフォームとして把握して、参加者間の社会的相互作用のプロセスを分析し、つながりや活動を創出するためのプラットフォームの設計要件を考察する仮説導出型の研究である。</p> <p>昨今、地域づくりの文脈において居場所の可能性に耳目が集まっている。コミュニティカフェ、まちの居場所などの多様な人々が自由に交流できる拠点が各地で相次いで設立され、社会課題解決に資する活動が生まれている。しかし、効果的な居場所を構築するための具体的な方策については、研究、実践ともこれからの段階といえよう。そこで本論文では、居場所や場、プラットフォーム、コミュニティ、サードプレイスなどの先行研究を十分に考究した上で、参加者の相互作用によるつながりと活動の生成過程、効果的なプラットフォームの設計要件という研究課題を設定した。そして、各地の居場所を分類し、各々のカテゴリーの代表的取り組みに対して、綿密な参与観察を実施した。</p> <p>質的データ分析の結果、参加者の変化については、信頼できる人間関係の拡大、自己探求、活動に向けた試行錯誤という要素が重要であり、探求や試行を許容し相互に助け合う規範を醸成していることが参加と活動継続の動機付けになることを明らかにした。</p> <p>さらに、協働プラットフォームの設計要件として、地域コミュニティの居場所にも適用可能であること、キーパーソン理念や思いを具体化すること、参加者のコミュニティを見守り成長に伴奏する内部変化や関係性のマネジメントが重要であることなどを導出した。そして、地域コミュニティにおける居場所では、参加者の相互作用の結果としてプラットフォームが創発し、キーパーソンは、参加者の内的変化とプラットフォーム生成の両面のマネジメントを担っていることを示した。</p> <p>本論文の各章ごとの概要は以下の通りである。第1章には、研究の背景、目的が述べられている。少子高齢化をはじめ、地域における様々な社会課題が山積する現在、人々のつながりや何らかの活動の創出が求められている。しかし、地域の活動に参加する動機は一様ではなく、多様なつながりをどのように構築するのかについては、今までほとんど触れられることがなかった。そこで、地域コミュニティの居場所を協働プラットフォームとして捉え、参加者同士の相互作用に着目して、参加者がどのような経験をしているか、どのようにプラットフォーム設計を行っているかという視点を定めた。</p> <p>第2章では、本論文が対象とする地域の居場所の現状を整理し、コミュニティや居場所などに関する研究フレームの設定を行っている。社会学を中心とした多様なコミュニティ概念を検討した上で、居場所研究の動向を綿密に調査して、地域コミュニティの居場所の定義を行った。そして、創発をもたらす場やプラットフォームなどの先行研究から、地域コミュニティの居場所における参加者のつながりと活動の生成過程、つながりと活動を創出するためのプラットフォームの設計要件という2つの研究課題を打ち立てた。さらに、プラットフォーム設計の変数として論じられている、コミュニケーションパターン、役割、インセンティブ、信頼形成メカニズム、参加者</p>			

論文審査の要旨及び担当者

No.2

の内部変化という要素を内的要因として、これらを前提要因（主体を集める要因）、促進要因（相互作用を促進する要因）とに分割し、あわせてプラットフォーム設計以外の周辺環境からの影響である環境要因も加えた上で、協働プラットフォーム設計要件抽出のための仮説検討モデルを示した。

第3章では、つながりと活動を創出するプラットフォーム設計に関する研究方法について論じられている。まず、質的研究方法の歴史や研究過程を整理して、長所と短所を見きわめた上で、研究課題に答えるためにふさわしい研究方法を明示した。次に、質的研究における5つの局面を参照しながら、現場に寄り添った研究、社会的相互作用論に基づく理論化、複数事例を通じた仮説構築型の事例研究、インタビューと質的データ分析、トライアングレーションによる現場への接続という研究の基本方針を固めた。そして、自らが立ち上げ、運営している地域コミュニティの居場所である芝の家でのアクションリサーチ、参与観察などの予備的調査の結果から分析フレームワークを設定し、各地の居場所3事例を取り上げ、参加者に対するインタビューデータのトランスクリプトを作成し、コードのセグメント化、概念化を行い、ストーリーラインを生成するという研究の流れを指し示した。

第4章では、本論文の対象として取り上げる地域コミュニティの居場所の事例を論じている。まず、取り上げる事例の妥当性を担保するために、居場所の形態を、居場所型（来場者の交流を主な目的にする）と活動拠点型（来場者が何らかの活動を行うことを目的とする）に分け、さらに、地縁コミュニティ重視（立地する地域の地縁コミュニティを重視する）、テーマコミュニティ重視（福祉や子育てなど特定テーマコミュニティを重視する）というテーマ別に分類した。そして、芝の家の取り組みを詳細に分析するとともに、それぞれのカテゴリーを代表する居場所の取り組み内容を述べた。

第5章では、1つ目の研究課題である参加主体の意識・行動変化の過程についての分析結果がまとめられている。4つの事例の参加者40名からの聞き取り調査の内容が詳細に述べられており、これらのトランスクリプトを作成し、意識、関係、行動から参加者の変化を観察する焦点的コーディングを取り入れた。そして、複数のコード化されたセグメントを束ねて概念化し、さらに大分類の概念を構築した。さらに、緻密な分析を繰り返して、780以上のコード化されたセグメント、11の大分類で構成される71種類の概念を抽出した。あわせて、時間的推移や物事の起こる順序や影響から関係づけを行い、概念のストーリーラインを生成した。その後、4つの事例全てにおいて観察され、15以上のセグメント数のあるコードを抜粋して事例ごとの特徴を考察した。その結果、居場所に参加することで、プラットフォームによる他者との相互作用が行われ、他者関係の変化、自己の意識変化、行動の変化が実現し、新しいつながりと活動が創出されることが判明した。さらに、信じられる人間関係の拡大、交流によって起こる自己の探求、行動に向けた試行錯誤という要素は、単線的に生じるのではなく、循環しながら変化が進展しており、プラットフォームへの参加は、それぞれの参加者のある状態からより自分らしい状態への移行であることを明らかにして、当初の仮説モデルを修正、再検討した。そして、居場所は参加者が変容を体験できる培養器となっており、このような場になるためには探求や試行を許容し、相互に助け合う規範の醸成が重要であることを指摘した。

第6章は、もう一つの研究課題であるプラットフォームの設計と効果について論じている。まず、プラットフォームの設計要素である、コミュニケーションパターン、役割、インセンティブ、信頼形成メカニズム、参加者の内部変化を内的要因（プラットフォームの設計に直接関わる要因）として、さらにこれらを前提要因（主体を集める要因）、促進要因（相互作用を促進する要因）として分割した。あわせて、立地条件や周辺環境などのプラットフォーム設計以外の周辺環境からの影響である環境要因についても考察をすすめた。その結果、全ての事例において、空間やプログラム、運営を工夫してデザインしていること、段階的な調整や外部環境との調整を行っていることが明らかになった。そして、ビジネスとは違い、多様な人々が参加し、目的を共有しにくい地域コミュニティにおける居場所で成果をもたらすためには、キーパーソンの思いや価値

論文審査の要旨及び担当者

No.3

観が重要であり、それを具現化してデザインするプロセスが不可欠であることを指摘した。さらに、キーパーソンは、信頼や役割、参加者の内部変化、外部資源という観点から関係性のマネジメントを実行して、それを促進するために空間やプログラムを設計していることを明らかにした。

第7章では、第5章と第6章の結果をまとめ、さらに深く考察を行い、つながりと活動の創出過程について総合的に分析を試みている。内部変化のマネジメント以外の4つの設計変数は、参加者の関係や意識の変化の機会を提供することで生じる要素であったが、内部変化のマネジメントは参加者の様々な変化をモニタリングし、適切なタイミングで声かけや情報提供などを行う伴奏型の支援であり、居場所全体を把握しながら調整をしていくことが重要であることを見出した。そして、参加者は参加を通じて意識や行動を変化させていくと同時に、参加者同士の相互作用の結果としてプラットフォーム自体も変化することを明らかにした。また、居場所は、地域の担い手が活動する拠点という位置づけだけでなく、担い手が生まれる培養器でもあるという可能性を示した。

第8章では、結論、学術的、実務的成果を示すとともに、限界や今後に向けた展望を議論している。さらに質的研究ならではの限界についても論じた。

本論文の学術的貢献としては、効果的なプラットフォーム設計に関する新しい知見を見出したことがあげられる。プラットフォーム概念については多様な分野での研究がすすんでいるものの、地域コミュニティにおける居場所に応用したものは数少なく、データのコード化、ストーリーラインの分析によってその設計要件についての妥当性のあるモデルを提示し、特に、参加者の内部変化のマネジメントという要件に光を当てて、参加者の変化とプラットフォーム生成の両面に与える影響を詳細に分析、検討できたことは今後の学術研究に与える貢献度は高い。さらに、参加者が自発的な活動を始めるプロセスを解き明かしたことは、これからの地域づくりの実践に大いに役立つ知見であり実務的貢献が大きいといえよう。昨今、いかに地域づくりの担い手を確保し、養成するかという議論が盛んである。本論文は、この社会課題解決への端緒が開けたと考える。

一方、本論文は、全国に数多存在する居場所のうち、多様な参加者が参集し、新しい活動が芽生えている代表的な4事例を取り上げたものであり、その他の分野の取り組みや失敗事例などを取り上げてはいない。そのため、示された結論は、限定的なものに留まり、普遍的な、一般化可能性のあるものとはいいい難いという課題も残る。居場所における相互作用、効果的なプラットフォーム設計要件を解明するためには本論文で用いた研究アプローチに依拠せざるを得ず、このような限界があることは自明なことではあるものの、今後はさらに多くの事例を取り上げ、フレームワークを精緻なものにしていくことが求められるだろう。

このような限界はあるものの、本論文は、地域づくりに資する居場所をいかに構築、運営するのかという、困難な、かつ重要なテーマに果敢に挑み、緻密な先行研究の検討を重ねた上で、アクションリサーチや参与観察などによるフィールドの多様なデータからコード化、ストーリーラインの生成につなげていったくだけは量、質ともに圧巻であり、新規性、独自性のある内容と評価できる。また、坂倉杏介君は芝の家の設立者として活躍しており、現場での数々の実践、経験に裏打ちされた本論文の主張には説得力があり、問題発見・解決のための実践知の創造を目指す総合政策学に対する貢献も大なるものである。したがって、本論文は、著者が研究者として自立した研究活動を遂行するために必要な能力と学識を兼ね備えることを示したものであると判断して、本学位審査委員会は坂倉杏介君が博士（政策・メディア）の学位を授与される資格があるものと承認する。